4月からの道徳科完全実施に備えて要注意事項５点（再掲）

2017(H29).11　後藤　忠

1　議論する道徳

この言葉は中央教育審議会答申の中で登場し、学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（以下、「解説」という）の２ページに書かれた言葉である。

しかし、道徳科の目標を達成するという観点から、この言葉をそのまま鵜呑みにしてよいだろうか？ つまり、他者と議論して、はたして児童生徒の道徳性は育つか、高まるか？という疑問である。

議論が好きで議論したい子供はいるが、それは一部に過ぎない。一部以外の多数の子供はどうだろう？ 議論することを強要されることで多くの子供の心は閉ざされてしまうのではないだろうか？

道徳性は、児童生徒が自己の道徳上の課題と向き合い、自己を深く見つめ、自己と対話することで育つのであって、他者と議論して道徳性が育つとは到底思えない。

しかし、独善的で自己中心的な自己の考えで満足することなく、他者と考えを交流し、自分の考えを修正したり、自分の考えに自信をもったりする学習活動は必要である。それは議論ではなく、話し合い活動であり、語り合い活動である。

だから、道徳科の学習での話し合い活動は極めて重要な学習活動と言える。したがって、道徳科の目標を達成する観点から、なぜ議論しなければならないかをよく検討しなくてはならないと思う。

2　「授業が単に読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちである」という指摘

この指摘は「道徳教育の充実に関する懇談会報告書」の「(多くの学校で道徳の時間の指導効果が顕われてないのは）授業が単に読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちである」という指摘である。だから道徳の授業を、今までの指導法にとらわれない、もっと自由で多様な指導効果の高い授業に変えていかなくてはいけないという指摘である。この指摘は本当に正しい指摘だろうか？

いやそれは違う。道徳の時間の指導効果が顕われていないのは、多くの学校が「型にはまった」といえるほど道徳授業をしてこなかったからであり、指導法の工夫・改善に努めてこなかったからに他ならない。このことは学校関係者なら誰もが分かっている明白な事実である。にもかかわらず、こうした間違った指摘を真に受け、浮き足立っている学校や教師の何と多いことか･･･。

今まで道徳の指導に熱心に取り組んできた学校の児童生徒の道徳性は（従来の指導方法で）十分豊かに育っている事実をきちんとリサーチしなくてはならない。それをしないままの批判は当たらない。

3　道徳科の目標が「～を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」となったこと

道徳性の諸様相の表記順に変更があった。

一方、解説には「これらの道徳性の諸様相には、特に序列や段階があるということではない。」と記されている。

では、なぜ表記順を変えたのか？ 変えなければならなかったのか？

道徳性の諸様相は、例えば「態度」が高位で、「心情」は低位などというような軽重や序列はないと考えるが、児童生徒の道徳性の発達に即した指導には順序というものがあると思う。

まず、豊かで瑞々しい道徳的心情の育成を重視した指導が基盤にならなくてはならない。道徳的心情はあらゆる道徳性（の発達）の基盤を成すものであり、その豊かな心情の上に確かな判断力や実践意欲、態度などの育成が図られなければ、それは「砂上に楼閣を築く」に似てとてももろく、

危険ですらあると思う。

今回の順序の変更は、学習指導要領に（今まで前例がなかった）「問題解決的な学習」や「体験的な学習」といった具体的な指導方法が例示されたことと何か関係があるのだろうか？　また、それらの指導方法を用いることで、どんな道徳性が育つというのだろうか？その点を曖昧にしたままでは根拠の明確な道徳授業論は語れない。

4　道徳科の評価

今、道徳科の評価への関心はとても高い。

その関心の高さは、今まであまり道徳授業に熱心に取り組んでこなかった学校ほど高いように思う。

ところが、その関心は「評価の意義や意味」にはあまり向いておらず、もっぱら評価方法や評価文例といった枝葉のことばかりに向いている。

これでは道徳科の授業そのものが心配である。教師が自分で授業計画を立てず、間違いだらけの教師用指導書をなぞるだけの授業をしていては児童生徒の道徳性は育つわけがない。当然、評価などできるはずがない。そもそも評価の目的は何か、それは授業改善にあるのだから。

荒削りでよい、教師は道徳科の目標にかなった授業を目指し、自分で考えた学習指導案で授業を行うことが何より大事である。そうすれば、評価は自ずからついてくる。

5　教員研修の在り方

私は、教員研修は「守破離」の道理をもって進めるべきだと考えている。

まず「守」、つまり基礎基本の習得から始めることが大切だと考えている。その「守」から確かな「破」が生じ、やがて究極の「離」に至るという道理である。

「道徳教育とは何か？」、「道徳科授業の特質や役割は何か？」、「道徳科授業の目標は何か？」などを正しく理解し、それにかなった指導方法の工夫・改善に取り組むのが筋道である。

最近、知人たちから「何でもありの道徳授業を目の当たりにし、大変困惑した」という話を聞くことが多くなった。特に若い教員の授業に多く見られるという。誰からも教えられず、「のびのびと自由に」が身に付いてしまったようだと嘆く。

ゲーム感覚でグループ活動をさせたり、場当たり的な方法論で解決しようとしたり、流れに乗って結果オーライで結論付けしたり・・・。

そうした授業を参観した人が、「これからは何でもありなんだ、真似しよう」と受け止められてしまうことが一番恐ろしいとその知人は言う。

要するに、道徳科の特質や道徳科の役割などの基本の理解が欠落しているからこういう事態に陥ってしまうのだ。研修会や研究会で指導助言を担当するリーダーや講師はこのことに十分留意して、初心者に教えるべきことはきちんと教えなければならない。

しかし、「研修は守破離の道理をもって行うべきだ」と言っても、カチンカチンの「守破離」では人の心は動かない。「柔らかい守破離」がよいと思う。

以上